ハジババの冒険 2

J・モーリア

岡崎正孝
江藤公名
宮崎尚夫 訳

東洋文庫
436

ハジババの冒険 2

J・モーリア

岡崎正孝
江浦公治
高橋和夫
訳

平凡社

おかざきしょうこう
岡崎正孝
1935年福井県生。京都大学大学院修士課程（東洋史学専攻）修了。
現職　大阪外国語大学教授
専攻　イラン近現代史，イラン土地制度史
著訳著　A. K. S. ラムトン『ペルシアの地主と農民』（岩波書店，1976年），『イスラム世界—その歴史と文化—』共著（世界思想社，1981），『基礎ペルシア語』（大学書林，1982）

えうちきんじ
江浦公治
1948年大阪府生。関西学院大学大学院博士課程（東洋史学専攻）修了（単位取得）。
現職　四天王寺学園教諭
専攻　イラン近代史
主要論文「19世紀のカージャール朝イランとヨーロッパ」（『イスラム世界—その歴史と文化—』所収）

たかはしかずお
高橋和夫
1951年福岡県生。コロンビア大学政治学部博士課程単位取得。
専攻　中東国際関係論
主要論文「パレスティナ問題」（『イスラム世界—その歴史と文化—』所収），「イランの『イスラム』革命とその地域的影響」（『国際政治』1983年5月号所収）

ハジババの冒険2〔全2巻〕　東洋文庫 436

1984年8月10日　初版第1刷発行

訳者　岡崎正孝
江浦公治
高橋和夫

発行者　東京都千代田区三番町5番地
下中邦彦

印刷　東洋印刷株式会社
製本　株式会社石津製本所

発行所　郵便番号102　東京都千代田区三番町5番地
電話 03-265-0451
振替 東京8-29639　株式会社　平凡社

© 株式会社 平凡社 1984
Printed in Japan

不良本は，直接読者サービス係でお取替え致します（送料小社負担）
定価は外箱に表示してあります

凡　例

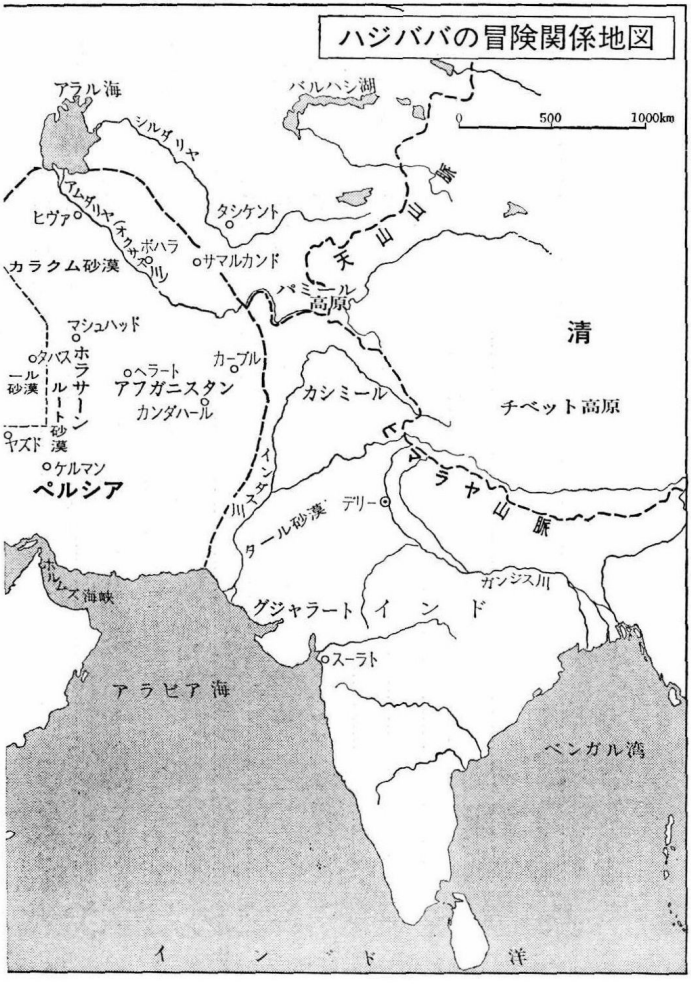
一　本書は、ジェイムズ＝モーリア著『エスファハンのハジババの冒険』James Morier, *The Adventures of Hajji Baba of Ispahan* (London, 1824) の全訳である。本訳には、底本としてウィルズ編 (ed. C. J. Wills, with an Introduction by F. Goldsmid, London : Lawrence and Bullen, 1897) を用いた。

二　訳出にあたり、本書のペルシア語訳 (Major D. C. Phillott 編、カルカッタ、一九〇五) を参照した。ペルシア語用語に付したルビの多くは、ペルシア語訳からとったものである。

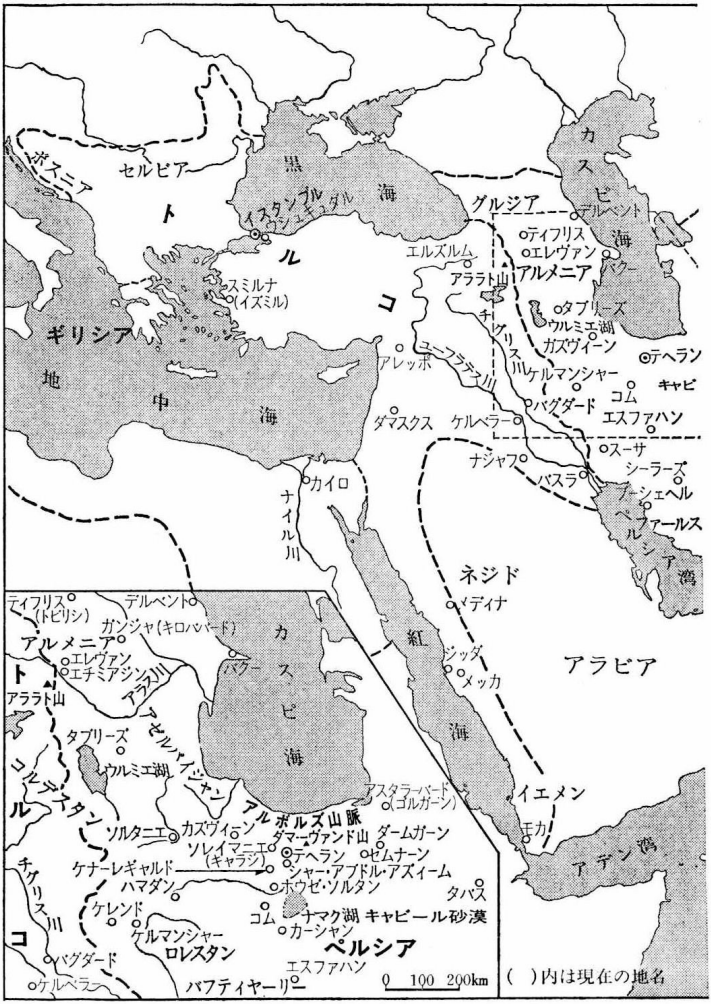
三　本書に収録した挿絵、写真のほとんどは、ウィルズ版所収のモーリア自身のスケッチと、ウィルズや他の英人の蒐集した写真などである。

四　原注は（　）で示し、訳注は〔　〕で示した。

五　固有名詞のカナ表記は、原則として、岡崎正孝著『基礎ペルシア語』（大学書林、昭和五七年）二〇三―二〇六頁に拠ったが、音引きは可能な限り省略した。たとえば、エスファハーンはエスファハンとした。また、慣用に従ったものも少なくない。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb


ブルガリア
セルビア
黒海
カスピ海
イスタンブル
ビザンチウム
トルコ
グルジア
ティフリス
エレヴァン
バクー
アルメニア
エルズルム
アララト山
スミルナ
(イズミル)
ギリシア
タブリーズ
ウルミエ湖
ガズヴィーン
テヘラン
キャビール砂漠
ユーフラテス川
アレッポ
ケルマンシャー
コム
バグダード
エスファハン
ダマスクス
ケルベラー
スーサ
シーラーズ
ナジャフ
バスラ
ペルシア湾
ファールス
地中海
カイロ
ナイル川
ネジド
メディナ
紅海
ジッダ
メッカ
アラビア
イエメン
モカ
アデン湾
ティフリス
(トビリシ)
デルベント
ガンジャ(キロババード)
アルメニア
エレヴァン
エチミアジン
アラス川
アララト山
タブリーズ
ウルミエ湖
アゼルバイジャン
カスピ海
アスタラバード
(ゴルガーン)
アルボルズ山脈
ダマーヴァンド山
ダームガーン
ソルタニエ
カズヴィーン
ソレイマニエ
(キャラジ)
テヘラン
セムナーン
ケナーレギャルド
シャー・アブドル・アズィーム
ハマダン
ホウゼ・ソルタン
タバス
ケレンド
コム
ナマク湖
カーシャン
ケルマンシャー
ロレスタン
ペルシア
バグダード
エスファハン
ケルベラー
バフティヤーリー
0 100 200km
( )内は現在の地名

目次

第三十七話　アルメニア人ユーセフとその妻マリヤムの話……三
第三十八話　アルメニア人ユーセフの話（つづき）。そしてハジババの決断……三
第三十九話　ユーセフ、ハジババの信頼に応える……三六
第四十話　ハジババ、上役に報告し、傷心のユーセフを弁護する……三九
第四十一話　ハジババ、ロシア遠征について述べ、刑部大臣の臆病ぶりを存分にあげつらう……四九
第四十二話　ハジババ、王様の宿営地に赴き、大法螺の見本になるほどの作り話をする……五五
第四十三話　ハジババを激しい苦悩へ投げ込む原因となった恐ろしいできごと……五九
第四十四話　ハジババ、旧友の講釈師に会って励まされ、その助言で危機から救わる……七二
第四十五話　ハジババ、聖域に避難する。奇妙な話を聞き、憂鬱な気分を紛らわす……八二
第四十六話　聖域でのハジババ、ペルシアで最高位の聖職者の知遇を得る……一〇

第四十七話　ハジババ、親友と信じていた行者に金を盗まれ文なしになるも、幽閉生活からは解放される……一三
第四十八話　ハジババ、エスファハンに戻り、父の死に目に会う……一二九
第四十九話　ハジババ、財産の相続人になるも、財産は見つからず、疑惑が渦巻く……一四三
第五十話　ハジババの財産を見つける手の内。そして、占い師ティーズ＝ネガーの人となり……一五一
第五十一話　占い師、首尾よく金を見つける。そして、ハジババの抱いた決意……一六七
第五十二話　ハジババ、母と別れ、有名な法学者の書記となる……一六四
第五十三話　モッラー＝ナダーン、金が儲かり、男たちを喜ばす新しい計画を語る……一七〇
第五十四話　ハジババ、客引きとなる……一七六
第五十五話　死んだと思っていた人に出会う。そして、結婚の世話をする……一八三
第五十六話　モッラー＝ナダーン、野心がもとで、その弟子もろとも破滅の道を歩む……一八九
第五十七話　ハジババ、思いがけなくも風呂屋で異常な体験をし、これが奇跡的にも深い絶望の淵からハジババを救う……一九六
第五十八話　危険な目に遭うも、幸運な結末となる……二〇三
第五十九話　正直者の鑑にはほど遠いハジババの行動。モッラー＝ナダーンの向う見ず……二〇八

第六十話　ハジババとモッラー、策略をねる。悪漢の間に信義などないことを知る……二三一
第六十一話　ハジババに下るべき罰がナダーンに降りかかり、ハジババ、骨の髄まで運命論者となる……二三六
第六十二話　ハジババ、あの風呂屋での異常な体験の続編を聞き、それから、罪人に堕される恐怖に怯えおののく……二三〇
第六十三話　ハジババ、見つかって捕えられるも、強運の星にふたたび助けられ、自由の身となる……二三九
第六十四話　ハジババ、バグダードに着き、最初の主人オスマン＝アガーに会う……二四四
第六十五話　ハジババ、パイプの商売を始める。オスマン＝アガーの娘、ハジに想いをよせる……二五〇
第六十六話　ハジババ、商人となってバグダードを離れ、イスタンブルに向かう……二五四
第六十七話　ハジババ、あるシェイフの未亡人の心を奪う。初めは驚きあわてたが、後には喜ぶこととなる……二五九
第六十八話　ハジババ、美しのシェケルレブと会い、話をまとめ、その夫となる……二六六
第六十九話　パイプ売りから名士にはなったが、化けの皮をかぶっていることでひしひしと感じる苦悩……二七二
第七十話　みせびらかしたいとの欲望が没落のもととなる。ハジババ、

女房と口論する……二七六
第七十一話　詐欺師とされ、ハジババ、離縁される……二八一
第七十二話　ハジババ、通りでのできごとで気持がほぐれ、オスマン爺さんの忠言に慰めを求める……二八七
第七十三話　仇討ちしようと考えるうち、新しい友、ミールザー＝フィールーズを得る……二九一
第七十四話　ハジババ、大使の腹心の部下となる……二九六
第七十五話　ハジババ、最初の報告書を出す。また、ハジババの働き振りについて……三〇二
第七十六話　ハジババ、ヨーロッパの歴史を書き、大使に伴われペルシアへ帰る……三一一
第七十七話　宮廷にフランク人使節を迎える儀式について……三一七
第七十八話　ハジババ、宰相の目に留り、その手先となる……三二三
第七十九話　ハジババ、ふたたび大臣の目に留る……三二九
第八十話　閑話休題。不幸はハジババより去り、ハジババ、大物となって、故郷に錦を飾る……三三四
注……三四一

ハジババの冒険 2

J・モーリア
岡崎正孝
江浦公治
高橋和夫
訳

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

第三十七話　アルメニア人ユーセフと その妻マリヤムの話

その日のうちにアーベランの高地に行って、馬を放す涼しい牧草地を捜すつもりだった。われわれは、普通ならその高地でキャンプしている遊牧民に、軍用の天幕と食糧をあて込んでいた。しかし、始まったばかりの戦争に恐れをなし、遊牧民は山の中にかくれてしまったということなので、日中の暑さの収まるまで、アシュタレクに滞在することにした。

兵隊たちは村のあちこちで休憩した。橋の下に下りていって、馬を丈のある草の中で杭に繋いでおく者もあれば、高い川床から水をひいている水車小屋を占領する者もいた。わたしは、川岸の岩の上、一番高い所にある岩棚に敷物を広げた。そこは四方を見渡し、ロシア国境からこちらへやって来るものは何でも見分けがついた。

二時間ほどぐっすり眠ってすっきりしたところで、例のアルメニア人の若者を呼びにやった。人の良い村人はわれわれに軽い朝食を用意してくれていた。わたしたちは何か食べたいと思っていたところだった。ここでわたしは若者にどうしてこんな目に遭ったのか、話をするように言った。

一休みして食事をしたので、元気が出てきた。朝の光が二人の座る所を照らし出し、若者の男らしい顔立ちの良さを余すところなく映し出していた。その生き生きした様子、真面目な話しぶりから、若者の話をすべて信用する気になった。若者の言うには、

「わたしはアルメニア生れのキリスト教徒で、ユーセフといいます。親父はガーヴミーシュルの村長です。村はみんなアルメニア人で、ペンバキというきれいな川からそう遠くない所にあります。ここから六アガチ（約三〇キロメートル）ほどの所です。ここは草木が青あおと生い茂っていて、豊かな牧草地

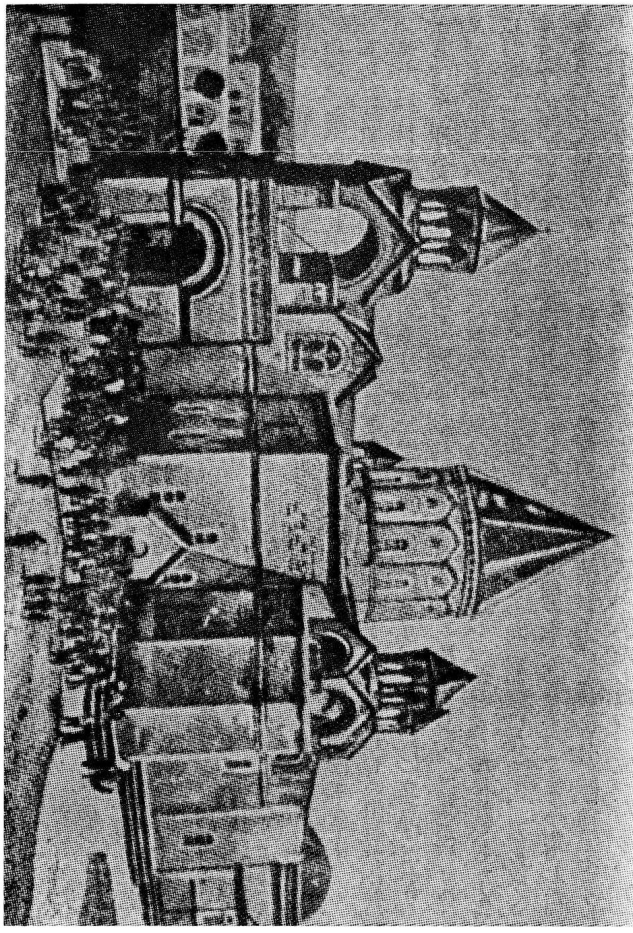
も沢山あるし、気候は涼しくて穏やかです。わたしたちは皆、健康で勇敢です。知事はあれやこれやと取り立てましたが、皆、貧しいなりに幸せでした。わたしたちは人里離れた山の中に住んでましたから、知事のお邸がある大きな町の近くの人たちほどには、圧制は受けずにすみました。生活は質素だし、家長に従って暮していました。

父方のおじは、エチミアジンの大司教に仕える助祭をやってます。母方のおじは村の神父です。自分の家族は教会ではいい顔でしたから、わたしも聖職につくことになっていたんです。親父は百姓で生計を立て、独力で村近くのかなりの土地を開墾しました。わたしの他に息子が二人いて、この二人で畑仕事は十分間にあいますので、わたしは教会に出されることになったんです。

十歳ぐらいの時、エチミアジンで読み書きとか、教会の儀式の作法などを習いました。勉強は楽しくて、手当り次第に本を読みました。ある僧院に、アルメニア語の本が沢山ある図書館があります。そこで、時どき何冊か借りてきては読みました。たいていは宗教書でしたが、アルメニアの歴史の本も手にしました。これには大変興味がひかれました。この本で、わたしらの国にはむかし、ほかの国の人たちからも尊敬された王様がいたことを学んだからです。今の落ちぶれた状態や、知事が誰かということを考えると、この軛をなんとしても振り落さねばと思うようになり、神父になるという考えを捨てることにしたのです。

そのころ、ペルシアとロシアの戦争が起りました。村は国境へ向かう軍隊の通り道になってしまいました。わたしは、家を守るために人手がいるだろう、教会の中にいるより家族と働く方がいいだろうと思いました。そこで、もう少しで司祭になれたんですが、エチミアジンの友達と別れて家に帰りました。みんなは喜んで迎えてくれました。

もうみんなは戦争の怖さを感じていました。ペル



ヒチニアンジンの教会

シア人とロシア人がやって来て、わたしたちは両方から略奪されたんです。（両方とも同じように怖いんです。）兵隊たちは自分の村や近くの村で、罪もないおとなしい人びとを苦しめました。この国境の戦争は、結果的には、どちらに軍配が上がったわけでもありませんが、そこに住む者にしてみれば、結果は恐ろしいものでした。しょっちゅう、敵軍の侵入に恐れおののき、そのうえ、わたしたちの政府の軍隊のきつい徴発をも恐れていました。作物は荒らされ、家畜は追っぱらわれました。

わたしらは捕虜として連れ去られる危険にさらされていました。財産を守り、飢えを免れる唯一の手段にと思って、汗水たらして畑仕事を続けましたが、いつも剣を腰に下げ、弾丸の入った鉄砲を背負って仕事に行きました。そして、誰であろうと人が来ると、すぐみんながかたまって守備態勢をとりました。こんなふうにして何年間か、どうにかこうにか作物を穫り入れてきました。神様のお恵みで、なんとか暮していけました。でもここで、自分のことをお話ししておかねばなりません。

二年ほど前のある朝、まだ夜の明けぬうちに、わたしはずっと遠くにある畑へ麦刈りに行きました。いつものように武器を持ってです。その時、ペルシアの騎兵が一騎、後に女を乗せ、わたしが立っている高台の下で曲りくねっている谷をぬって、凄い勢いで飛ばしてくるのが見えました。女はどう見ても無理やり乗せられたらしくて、わたしを見ると大きな悲鳴をあげて、手を伸ばすんです。

わたしはすぐに、けわしい山腹から谷底へ飛ぶようにして降り、騎兵の前に立ちはだかり、『停まれ』と言って刀を抜きました。騎兵が駆け抜けようとした時、手綱をつかむような格好をしたんですが、騎兵は、後の女が邪魔になって、刀を抜くことも、背中の鉄砲を取ることもできませんでした。それで、馬の速力を上げてわたしを踏み越えようとしたんです。でも、わたしはつっ立ったまま、刀で切りつけ

てやったので、馬は突然はね上がりました。びっくりした女はつかんでいた手を放して、馬から落ちてしまいました。騎兵は邪魔がなくなったので、鉄砲を使おうとしたんですが、わたしが奴に狙いをつけているのを見て、そのまま逃げてしまうのが賢明とみたのか、行ってしまいました。

アルメニア女性（口を被っているのが内側のベール）

わたしは女を助けようと駆け寄りました。女は大怪我をして、気絶していました。服からアルメニア人だと分りました。被っている外側のベールはもう外れていましたが、風に当ててやろうと思って、内側のベール（アルメニア女は普通これをつけている）をすぐにとりました。わたしはびっくりしました。見たこともないような美人ではありませんか。わたしの腕に抱かれているこのかわいい娘は十五歳ぐらいでした。娘を眺めている時に感じた恋と喜びと心配の入りまじったぞくぞくする気持を、わたしは一生忘れることはできません。

わたしは、最初の激しい熱情をこめて彼女の上にかがみこみました。こんな気持になったのは生れて初めてのことでした。目の前のもののほかは何もかも忘れてしまいましたので、彼女が目をあけて、生命のあることを示さなかったら、わたしはそこにいつまでもじっとしていたでしょう。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb